

明治学院礼拝堂のできるまで

教養教育センター客員教授 中島耕二（1970年法学部卒）

今年は、1916（大正5）年3月27日に明治学院礼拝堂の献堂式が行われて、100年目の節目の年にあたります。礼拝堂は一世紀にわたり明治学院の歴史を見つめて来た生き証人ですが、その生い立ちや見て来た過去を尋ねても黙して語ることはありません。そこで、本日は礼拝堂に代わって私から、その誕生までの経緯を皆様にお話しようと思います。

話は1887（明治20）年9月に溯りますが、築地居留地と麴町にあった東京一致英和学校と英和予備校の生徒280人が明治学院普通学部生徒として白金の新キャンパスに移ってきました。校舎は現在礼拝堂のある場所に建てられた「サンダム館」でした。この校舎はアメリカのオランダ改革教会信徒のサンダム夫人から、亡夫の記念として7,000円の寄付を受け、その資金によって建てられたものです。石材の基礎の上にケヤキの柱、ヒノキで床や壁が張られ、一部3階建ての立派な建物でした。2階の北側に400人を収容する講堂があり、礼拝のほか学院の各種行事の中心集会場として使用されました。

しかし、学院関係者には白金に移転当初から独立した礼拝堂を持ちたいという思いがありました。1888（明治21）年6月、東京一致神学校で教鞭をとったこともあるE・ローゼイ・ミラー宣教師が盛岡伝道に赴任することになり、築地居留地29番に自宅として構えていた大邸宅を、将来明治学院の礼拝堂建設のためにと地上権と合わせて、学院理事会に寄付の申し出をしてくれました。1903（明治36）年2月、学院はこの邸宅の売却代金1万5千円をもって、新たに礼拝堂の建設に着手しました。設計はドイツ人技師ハルト・ゼールに依頼し、現在の正門を入れて右手の記念館前の芝生の位置に年末までに、尖塔のあるドイツ風石造りの瀟洒な礼拝堂が完成しました。ファサードの円形の大窓にはドイツから取り寄せたステンドグラスが用いられ、奥ゆかしい光のもとで毎日の礼拝が行われ、学院関係者、学生および生徒の喜びは一入でした。大金を寄付したミラー宣教師は建物に自分の名前を冠せられることを辞退しましたが、学院では感謝の意を込めて「ミラー記念礼拝堂」と名付けました。

ところが、礼拝堂が落成して間もない1905（明治38）年3月13日、関東地方に強い地震があり、この新礼拝堂に大きな亀裂が生じました。もともとこの場所は地盤が悪く、計画の段階で井深梶之助総理や熊野雄七幹事から反対意見が出ていましたが、設計者のゼールは譲らず、同地に建設された経緯がありました。学院ではすぐに大規模修理を施しましたが、1909（明治42）年3月に再び大きな地震に見舞われ、前回にも増して激しく損壊し、とうとう使用に耐えられなくなりました。そこで、礼拝は再びサンダム館の講堂で行われるようになりましたが、ミラー記念礼拝堂は修理か再建かの決断に迫られました。学院では東京駅設計者の辰野金吾博士にも診断を仰いだ結果、

立て直しが適当という結論に達し、遂に建設後5年余りで取り壊すことに決しました。

その後、学院では学生・生徒の数が増えサンダム館は手狭となったことから、普通学部校舎の新築計画が起こり、国内外に向け募金運動が展開されました。幸いインブリー博士および井深総理の尽力で、建築費の3分の2がアメリカ長老教会および同改革教会から寄せられ、1911（明治44）年11月3日に普通学部新校舎の献堂式を行いました。その結果、サンダム館は講堂兼高等学部校舎となりました。こうした折の1914（大正3）年11月24日、突然サンダム館2階の講堂天井から火災が発生し、またたく間に校舎は全焼してしまいました。

学院では、ミラー記念礼拝堂を失いさらにサンダム館の焼失によって、礼拝および全校学生・生徒の集まる集会場を失ってしまいました。そのため、新礼拝堂と高等学部用に新サンダム館の建設が緊急の課題となり、学院ではこの資金をアメリカ長老教会および同改革教会の両海外伝道局に求めましたが、「臨時の支出は現在の財政状態では無理である」との回答が、両方の海外伝道局からありました。しかし、学院理事会では他に頼むべき方法がなかったため、重ねて海外伝道局に詳細な事情を説明して、再度経済支援を乞うことにしました。この厳しい交渉を学院から委ねられたのは、引き続きインブリー博士でした。

インブリー博士はすでに72歳の老齢の身でしたが、学院理事会を代表して1915（大正4）年2月16日付けで、アメリカ長老教会海外伝道局主事スピーアーに渾身の「上申書」を作成し、これを発信致しました。

「.....現在の経済状態に鑑み、明治学院の今回の冀願に貴局が応じかね候趣は十分諒解仕候。過去に於て、貴局が本学院の為に与えられし御援助に対して本学院理事会は満腔の感謝を表し.....」と書き出して、学院の教育環境整備の急務と資金的窮状を具体的提案とともに述べ、理路整然かつ熱誠を込めて以下の通り依頼しました。

- ・ 新礼拝堂は建築事務所の「ヴォーリス・ヴォーゲル合名会社」と交渉し、旧ミラー記念礼拝堂の諸資材をフルに再利用し、新築3万円の経費を1万5千円に抑える
- ・ セレベンス氏からの海軍墓地の土地購入寄付1万5千円を、新礼拝堂建設資金に充当することを依頼する
- ・ 新サンダム館は、1万8千円の経費。火災保険1万円とサンダム女史に令兄の記念寄付8千円を充当することの承認を依頼する
- ・ ジェームス夫人からの寄付1万円を新サンダム館の修繕積立金として保管するが、サンダム女史からの寄付が到着するまで、この資金を新築費用に流用

その結果、海外伝道局からセレベンス氏の了解が得られたとの返事を得ることができました。ところが、折からの第一次世界大戦によって建築資材が高騰し、そのため工事発注先のヴォーリス合名会社は一部設計を変更して、9月3日に学院と新礼拝堂および新サンダム館の建設契約を結び、早速基礎工事に取りかかりました。同年11月30日に両方の建物の定礎式が行われ、たまたま来日していたアメリカ長老教会海外伝道局主事スピーアーおよびアメリカ改革教会主事チェンバレンがそれぞれ新礼拝堂と新サ

ンダム館の「隅の親石」を据えました。その後工事は順調に進み、新礼拝堂は1916（大正5）年3月に完成、27日に卒業式を兼ねて献堂式が挙行されました。一方、新サダム館は5月に、現在のヘボン館の場所に完成しました。インブリー博士は直ちに、セレベンス氏に新礼拝堂の写真を添えて、深い感謝の言葉に満ちた手紙を送りました。

この新礼拝堂は石材をはじめ旧ミラー記念礼拝堂の資材が多く用いられましたが、そのミラー宣教師は礼拝堂の完成を見ることなく、一時帰国中の本国で1915年8月7日、海水浴中に心臓麻痺で急逝しました。享年71歳でした。そして、新礼拝堂建設のため資金調達に奔走したインブリー博士は、このミラー宣教師と重従兄弟（両親が兄弟姉妹）の間柄でした。

1919（大正8）年6月3日、新礼拝堂の設計者メレル・ヴォーリスは子爵令嬢一柳満喜子との結婚に際し、自分の作品で思い出深いこの礼拝堂で結婚式を挙げました。その後、礼拝堂は1923（大正12）年9月1日の関東大震災で大きな被害を受け、補修と同時に補強のためバットレスが取り付けられ、1934（昭和9）年には両袖廊の拡張工事が行われ、現在の美しい十字形になりました。

礼拝堂は今日も黙して、明治学院の「建学の精神」を私たちに示してくれています。100歳の誕生日を心からお祝いしたいと思います。